在校生・卒業生・保護者・教職員

進路通信 2016/07 後期

北海道釧路湖陵高等学校進路指導部

◆特集１　「切り替える」とは「助走期間を大切にすること」　◆

湖陵祭も終わり、いよいよ夏休み間近です。湖陵祭への準備には、精一杯取り組めたでしょうか。うまくいったという満足感はすばらしいことですが、自分達なりにやれるだけはやったという充実感もまた、立派な財産です。うまく人と協力できなかった、もっとこうすれば良かったという悔いも、自分を見つめ直す勇気があるからこそ生まれてくるものです。自分のことを自分で見つめ直せない人は、後悔すらできない（反省すらできない）ので、それも財産になることでしょう。

さて、湖陵祭も終わり、「切り替えないと」と思っている生徒は多いと思います。湖陵祭に力を注いで、勉強がおろそかになっている人もいるのではないでしょうか。あるいは、夏休みに取り戻そうと「夏に期待する」生徒もいると思います。特に 3 年生に言いたいのですが、「夏休みにこれも、あれもがんばって」と期待して（意欲に燃えて）も、うまくいかないことの方が多いと思います。今まで、勉強する習慣がない状態で、いきなり、1 日 10 時間といってもうまくいくはずがありません。3 年生から夏休み後によく耳にするのは、「もっと夏休みに勉強できると思っていたのに・・・、もう夏休み終わっちゃった。」という言葉です。1・2 年生も同じです。

さて、どうすればいいでしょうか。面談等で生徒の話を聞いていて気付いたのですが、夏休みにいいジャンプができない人の共通点は、「助走がないこと」だと思います。体操選手などの例を出すまでもなく、いい跳躍をする選手は、ものすごい勢いで助走しますよね。勢いだけでなく歩数等も計算に入れて助走します。いずれにしても、助走が大切です。その助走期間にあたるのが、２４日（金）までの期間ではないでしょうか。今日、家庭学習が「ゼロ」で夏休みの飛躍もへったくれもありません。湖陵祭が終わった今、助走期間は始まっているのです。

しかし、いいジャンプは助走だけでは、成り立ちません。そうです。「踏み切り」です。これにあたるのが、学校で行っている「夏期講習」です。これが、踏み切りです。夏期講習が夏休みの最初に設定されているには訳があります。夏休みのがんばりを支える「踏み切り」の役割があるのです。助走と踏み切り、「夏休み前の全力勉強」と「夏期講習」で夏休みに大きくジャンプしてほしいですね。夏休みまで、数日しかありません。助走期間は短いですが、短いからといって、助走しても意味がないわけではありません。助走期間は、夏休みにしたいと考えている勉強をしてみることです。勉強量を増やしたいと思っている人は、今日から増やしてみることです。助走期間の全力勉強が飛躍をもたらす可能性を生むのです。

◆特集２　学問の「本質」を究める　◆

３年生は最後の高体連、最後の湖陵祭が終わりました。後は受験のみです。湖陵祭明けの夏休みについて卒業生からいろいろと話を聞きました。

成功
- 毎日１０時間、コツコツと勉強する
- あれも、どれも、ではなく、基礎基本を中心にできることを確実に学び、理解していく
- 好きな教科は好きなだけ究め、苦手科目は時間を決めて取り組む

失敗
- 切り換えがうまくいかず、規則正しく生活できなかった
- 基礎基本は理解できたことにしてしまい、標準以上の問題ばかりチャレンジする（４ステップだと、Ｂ問題を中心に演習してしまった）
- 各科目の目標点が漠然としすぎて、何となく勉強してしまった
- センター試験の過去問だけをやる

３年生には６月１０日（金）の進路説明会で話しましたね。まずは１０時間。自分自身で考えたオリジナル計画でドンドン取り組んでいきましょう。センター試験は過去問ばかりやっても力は付きません。あくまでも基礎・基本です。それだけで７割は取れるんです。

もう一つは各教科、何点を取るかを明確にすること。その点数を取るための勉強をしてください。あとは自分を信じてやっていくだけです。

どの学年でもそうですが、学問を学ぶ、ということはただ単純に暗記すればいいものではありません。高校受験ではそれが通用したことでしょう。塾に通い、片っ端から丸暗記しまくっていた生徒も多かったのではないでしょうか。

しかし、大学受験では全く歯が立ちません。歴代の湖陵生は自分でそれを悟り、勉強の仕方を自分なりに変えていきました。

では今の生徒はどうでしょうか。何となく分かってはいるのに中学時代と同じ勉強を続けている、そんな生徒が多いと思います。

学問の「本質」を究めようとすれば、それだけ深く物事を学ぶことになりそこでようやく「理解」したことにつながるのではないでしょうか。その結果が勉強を「楽しむ」ことにも結びついてくるはずです。早く本物の「学び」を味わってください。

下の４択は２年生の地理の夏休み課題の１つです。１つだけヒントをあげましょう。

問　小千谷市の今後の都市計画に関する文として適当でないものを、４つから選べ。
①川の両岸を結ぶ旭橋の渋滞兼和のために新しい橋を建設する。
②ＩＣ付近に工業団地を建設する。
③旭橋北側の河川右岸の河川敷に大規模住宅団地の開発を行う。
④市街地を迂回するバイパスを建設する。

この問題は地形図が既に載っているので、生徒はまずは地形図を見て判断するのでしょう。しかし、ある都市の都市計画についてですから、何も地形図を一生懸命見る必要性はないです。釧路市をより良くしようとする都市計画をイメージしてみましょう。そう考えられるかがまずはポイント。

地理という学問において大切な用語は③にある「右岸」です。あとは何もありません。但し、一文一文を理解しようとすると理解しないといけない言葉が２つあります。「河川敷」と「バイパス」です。安直な生徒は「河川敷」ってどんな感じだろう、とか「バイパス」ってよく分からないけど、まあ他の文章を見てやればできるべさ、なあんて考えてしまいます。

ここです！！！学問の「本質」を究めるっていうのは自分でしっかりとイメージできるかどうかなんです。「スマホ」で調べれば皆さんのことですから２秒で済むんです。この作業をするか手を抜くか、それこそが勝負の分かれ道なのではないでしょうか。

どの教科、科目も同じことが言えるはずです。必ずしも学問の「本質」ではないかもしれない。しかし、究めようとするならば手を決して抜く所ではないです。時間としてはほとんど変わらないこの作業、さああなたならばどうする！！！

◆特集３　夏休みのポイント　◆

夏季講習

「寝坊してしまったので、午後の部活動から参加しよう」などという甘っちょろい考え方では、とうてい受験では戦いきれない。休むことなくきちんと受講することが大切である。講習内容は、担当の教員が特に必要と考える内容がつまっているはずである。重要な内容を一気に学習する好機である。3 年生は人生最後の夏季講習にすべく、がんばれ。

夏季講習の復習

夏季講習の復習も大切である。復習とは、家で解答集等を見ずに解き直したり、辞書や資料集などを使って確認したりすることだ。それを実行するからこそ、力がつくのである。ここで陥りやすい罠がある。学校の講習も学校外の講習も生徒が理解できるように説明がなされる。その場では、「わかった」感じがするからこそ、「わかったんだから復習はいらない」と思っている高校生が多い。わかったと思っているものを、きちんと答案として自力で「解けるかどうか」をもう一度、同じ問題に挑戦してみることを通して確認する。それが復習だ。

テキストのやりっ放しは中学生にでもできる。中学生は大学には行けない。つまり中学生の時

と同じ勉強の仕方や勉強時間では、大学受験に失敗する。こんなことははじめからわかっていることだ。もう一度、自分の勉強方法・時間を見直そう。

進路そのものを考えよう

夏休みは「進路」そのものについて考えるよい期間です。保護者の方ともジックリ時間をかけて話してみましょう。時間がたくさんあります。有効に使って下さい。

◆特４　基礎・基本とは　◆

今回はある予備校が４月に新たに入ってきた浪人生に対して配布した冊子にある各教科の学習法を抜粋します。本校でも各教科の先生が口すっぱく言ってきたことがしっかりとまとめられています。自分の勉強と比較してください。そしてこれからの学習の工夫にぜひ結びつけるように。

英語

最初からあせって「速読法」に飛びつくのは、練習試合や難曲に飛びついて自己満足を得るのと同じで危険です。ひたすら「単語帳」だけをやるのは筋肉トレーニングや音階練習だけで根性だけを養うのと同じです。

実際に授業が始まると、見かけでは簡単な内容に見えます。そして「こんなことはもう知ってるさ」と、いいかげんに聞いているうちに、またわからなくなってしまいます。誰でも経験をしたことがあるはずです。できて当たり前の問題ができただけで家庭学習や授業に見切りをつけたりするのは最低の勉学態度です。「自分ができたときに、なぜできたのかを考えること」、ここにこそ、「自分にはできそうもない問題に直面した際の心構え」のヒントがあるのです。

「わかったつもり」で中断したり、自己流に誤解を積み重ねていって途中から嘘の上塗りをしたりしないように、講習や授業を受け止める素直さが必要です。「自分をごまかしはじめたとき」「自己流で勝手にやりはじめたとき」。その時にもう一度立ち返って勉学に励むこと

数学

①数学用語や記号の定義、計算などの基本的知識、個々の基礎概念の理論的意味を把握す　る
②基礎概念の応用的意義を理解し、各分野の全体像をつかむ
③個々の概念を総合して使いこなし、問題に応じて自在に解決する能力を身につける

②の段階までが基礎段階です。①の段階がクリアされていないのに，いきなり③のための学習をしても学力は伸びません。「数学は積み重ねの部分がある」のです。

各項目について具体的にお話ししましょう。

①は一言でいえば教科書の内容を身につける、ということです。意外に身についていないのではないでしょうか。たとえば三角比の定義を述べよ、正弦定理を証明せよ、という開いに即座に答えられますか？また、どうして三角比などというものを考えるのか説明できますか？このようなことを知らずに数学を学習するのは滑稽ですらあります。

②は各分野の典型問題とその解法を修得している、ということです。「典型問題」といっても、入試によく出る問題という意味と総合問題のベースとなる汎用性を内包する問題という意味の二種類が考えられます。ここでは後者を指します。単なる暗記ではなく“どうしてそう考えるのがという解法の根拠や必然性までじっくり考察することが大切です。これは①を経ていなければできないことです。

③は応用力・思考力を身につける、ということです。もちろん問題演習が中心です。複雑な問題を分析していくつかの問題に分割したり、逆から眺めてみたり、実験してみたり、等々から、②で修得した「典型問題」に帰着させることです。

授業への心構えは、「頭を働かせ手を動かして」学習することです。授業を黙って見開きしていればよいということではありません！授業前、授業中、授業後のどの場面においても自分の手を動かすことが極めて重要です。じっと見つめていれば覚えられるとか、解法の手順を知っていれば解けるという人に限って実際の試験で得点できていないようです。試験には時間制限があります。普段から書き慣れてないことを書くのには時間がかかります。頭の回転に手がついていかなければ、わかっていても得点にはなりません。身体感覚の一部として数学の解答が論述できるようになっていなければならないのです。理解しているということと実際の試験で得点できるということの間には大きなギャップがある

ことが特に数学においては顕著であることを肝に銘じてください。

その日のうちに復習することが復習のポイントです。忘れた頃に復習しても、わからないことが出てきて質問が必要になったり、わからなくてその先に進めなくなったりします。質問の時間や学習の中断など、時間のロスが大きく、非能率的です。少なくともその日のうちにやったことは独力で再現できるようにする、関連事項をまとめるなどすることです。

ということは、授業でしっかりと理解できないと復習ができない、時間がかかりすぎるになってしまう。授業でできなかった問題は家でどれだけ時間をかけても理解はできはしません。

現代文

まずは文事を読むとはどのようなことか、そしてその読むことと解くことがどのような関係にあるのか、その理解とそれに基づく学習を進めることが、後期に入って大きく飛躍するための条件であることを忘れてはならない。

文章を読むとは、部分の集積から全体を読み、その上で全体の枠組みから部分の意味を明確にする、ということ。だが部分は部分として読むことができず、全体が見えたとき初めて部分が読めるようになるという逆説的な過程をたどる。そこにこそ文章を読むことの喜びと難しさの秘密があるといえるだろう。日常的にはこのような文章の読み方をしている人は、あるいは少ないのかもしれない。新聞や雑誌は〈目を通す〉ものであり、新聞を〈読めない〉と感じる人は少ないだろう。しかしひとたび新聞に載った文章が入試問題に出題されると、読めたと思ったのは〈感じ〉であって、明確な言葉で表現される前の〈イメージ〉にすぎなかったことがわかるだろう。この事実を認めるなら、どれほど大変であっても、段落と全体の枠組みをつかみながら読んでいくという、困難な作業に取り組むほかはない。「試験時間は短い」「じっくり読んでいる暇はない」…確かに受験生が気の毒なくらい試験時間は短い。しかしだからといって、〈目を通す〉ような速読法が、〈実戦的〉として練習され、あとは〈解き方〉なるもので解決しようとするなら、文章に〈慣れる〉以上の読む力＝解く力はつかない。１つのまとまりある文章を何度も読み返して言葉と格闘したことのない人に、知的思考力や読解力の飛躍が訪れることなどあるわけがありません。復習は必ずおこなうこと。その問題を通して必要な力＝考え方を身につけるようにしたい。選択肢の見分け方や消去法、傍線の分解や言い換えや要素の寄せ集めだけでは何の力にもならない。何を身につければよいか、頭の中で授業を再現しながら復習を進めたい。復習なくて飛躍はない。読解力はきみの一生の力となるだろう。

古文

古文を学ぶにあたって、皆さんが常に念頭に置いておかなければならないのは、大学入試の古文では、「初めて出会った文章」を読み解く力が求められるということです。定期テストでは試験の出題範囲があらかじめ告知されているので、該当する箇所さえ学んでおけば、ある程度は対応できるでしょう。しかし入試では、どんな文章が出題されるか、全く分かりません。ですから、大学入試をめざす上では、例えば教材の現代語訳や問題の解答をやみくもに丸暗記するような学習は、何の役にも立たないはずです。

古文の学習で大切なのは、「なぜ」このような解釈になるのか、「なぜ」このような解答になるのか､その思考のプロセスや論理のメカニズムをしっかりと自分のものにするということです。「初めて出会った文章」に対応できる力を養成するために、学習の過程では、「なぜ」を大切にして訓練を積み重ねていくことが肝要なのです。

授業以外での模擬試験は重要な教材です。試験時間中に一生懸命考えても出来なかったところは、早めに手当をしておかなければ学習の伸展は望めません。また、答案が返却された後、自分なりの解答を書いたにもかかわらず得点できなかったところについては、とりわけじっくり検討してください。自分ではなかなか気がつかない誤りを犯した結果、減点されているということが多々あるのです。これは試験という演習を通じてこそ、思い知ることが出来るものです。

漢文

漢文は、わずかな時間でも正しい方法で学習すれば、確実に実力をアップさせることができる科目である。

①基礎的な漢文法のマスター　返り点や句形・語順といった漢文法の基礎は、漢文を読むために不可欠な道具であり、また漢文で最も得点に直結する知識でもある。

②国文法の基礎を固める　漢文を読む際、とりわけこれを書き下すためには、動詞の活用と助動詞・助詞への接続といった国文法（文語文法）の基礎力も必須となる。